戦時下・神奈川における報国寮の研究

矢野慎一

一　はじめに

筆者は「戦時下の小田原地方を記録する会」（以下、記録する会と略す[1]）の会員として、神奈川県西部における戦時史研究に従事してきた。その中で、かつて箱根町畑宿に箱根報国寮という青少年の訓練施設が存在していたことを知った。さらに神奈川県立公文書館が所蔵する県の公文書にも大量の報国寮関係史料が含まれていて、箱根の他に丹沢・綾瀬・三保・鳥屋（とや）の合わせて五カ所に報国寮があったことを知るに及び、これらの施設がどのような性格を持ち、どのような事業を行っていたかに強い関心を抱くようになった。

その後、筆者の怠慢から研究が進まない時期が続いたが、一九九六年八月にようやく、箱根報国寮の体験者から直接聞き取り調査を行うことができた。その内容は、記録する会会誌『戦争と民衆』第三十八号（九七年）に発表した。さらに記録する会編『市民が語る小田原地方の戦争』（二〇〇〇年）や同『小田原地方の戦争遺跡』（〇五年）でも箱根報国寮を取り上げた。そして、井上弘との共著『戦時下の箱根』（夢工房　〇五年）で初めてまとまった形で箱根報国寮を紹介することができた。

今回、既に収集した史料に、新たに綾瀬報国寮の体験者の聞き取りと丹沢報国寮に関する体験記を加え、今までやや箱根に偏ってきた内容を、五カ所の報国寮全体を展望する形でまとめ直し、戦時下の神奈川における報国寮事業について、その歴史的意義を明らかにしたいと思う。

二　研究史

公刊された書物の中で報国寮を扱っているものは非常に限られているが、簡単に紹介しよう。

『箱根町教育史』（箱根町教育委員会　一九七〇年）には、「畑宿の箱根報国寮」として、ほぼ一頁にわたって戦前から戦後への歩みが記されている。戦後に旧報国寮の建物を、新制湯本中学校の校舎として転用するための県への払い下げ陳情書が掲載されており、同文のものが神奈川県立公文書館にも所蔵されている。

『神奈川県林業史』（神奈川県農政部林務課　七一年）は、林務課ＯＢ

の回想記を集めたもので、なかでも丹沢報国寮の初代寮長だった宮沢敏雄の「報国寮の回顧　造林史について想う」が貴重である。また、箱根報国寮の建物を使用して戦後設立された愛林青少年訓練所について、その所長だった川上主計の「人生往還の道　愛訓小史随想」もある。『神奈川の林政史』（神奈川県農政部林務課　八五年）には、第十三章「林業教育」の第一節「戦前の実践教育と報国寮」として報国寮に関する記述があるが、その内容はほぼ前掲宮沢敏雄回想記の引き写しである。

『綾瀬市史4　資料編・現代』（綾瀬市　二〇〇〇年）には、綾瀬村青年団団報に掲載された丹沢報国寮入寮者の体験記と、県営綾瀬苗圃（びょうほ）に勤務した齋藤定八の日記が紹介されている。「齋藤定八日記」は、苗圃や報国寮、用地買収の様子などを詳しく記しており、大変貴重である。『綾瀬市史7　通史編・近現代』（綾瀬市　〇三年）には、綾瀬報国寮に関する記述と、厚木海軍諸施設用地の買収にともなう、県営綾瀬苗圃と綾瀬報国寮廃止の経緯が述べられている。

その他、旧制中学校や高等女学校の学校史の中で報国寮について触れているものがいくつかある。[2] 多くは写真の掲載や、学校日誌、職員会議録など断片的な記録を紹介するに留まるが、その中で最も詳しく報国寮を取り上げているのが、県立横浜第三中学校（現、県立横浜緑ヶ丘高校）の創立六十年記念誌である。これらは、以下で随時紹介したい。

以上、筆者の知る限り、神奈川の報国寮に関する研究が公にされた例はない。

三　報国寮とは

報国寮とは、一九三七年（昭和十二）から四五年まで神奈川県が運営した青少年を事業対象とする勤労訓練施設であった。三七年に設立された丹沢報国寮を皮切りに、翌三八年に箱根報国寮、四一年に綾瀬報国寮、そして四三年には三保報国寮と鳥屋報国寮が相次いで設立された。さらに第二丹沢報国寮の設立も予定されていたが、これは設置されずに終わった。戦局が切迫してきた時期にもかかわらず、施設が増設されていることからわかるように、報国寮が当時神奈川県にとって重要な事業と位置づけられていたことがわかる。

報国寮の事業目的は、「日本精神を体得せしむると共に心身を鍛練し以て献身奉公質実剛健なる中堅国民を養成する」[3]ことである。要するに、当時神奈川県の重要な基幹産業であった森林治水事業について若い県民に理解と協力を求め、同時に勤労作業を通じて心身を鍛練し、戦争遂行に向けた青少年の心構えを確立させることが目的であった。

そのため、県内の丹沢・箱根地区の山中に、集団生活を送りつつ、勤労奉仕を行える施設を建設したのである。ただ、当時の県内の学校では、軍事教練の一環として、富士山麓などで長期間の野外演習を行い、バラック造りの廠舎（しょうしゃ）で合宿生活を送っていたので、報国寮で合宿訓練を行うことはそれほど違和感がなかったのではないだろうか。しかし、その内容は重労働の森林治水作業であり、肉体的には相当大きな負担だったと思われる。

四　報国寮設置に至る経緯

神奈川県で報国寮事業が実施された経緯については、前掲『神奈川県林業史』所収の宮沢敏雄「報国寮の回顧　造林史について想う」に詳しく述べられているので、内容を要約して紹介しよう。

宮沢敏雄は、一九三七年（昭和十二）十月の丹沢報国寮の設立当初からの職員（初代寮長・農林技手兼社会教育主事補）で、四四年十月に有馬（現、海老名市有馬）の農場長として転出するまで勤務した。元栃木県の農学校教師であったが、大日本連合青年団を通した招へいに応じて神奈川県に出向した人物である。

まず宮沢は、当時森林治水事業に対する一般国民の理解が不充分であり、国民への啓蒙活動を行い、理解を深めるよう努力しなくてはならないという林政関係者の認識があったとする。

そして、三四年と三五年の大規模な風水害によって日本列島が甚大な被害を蒙ったことから、政府は第二期森林治水事業を策定し、三六年から六〇年までの二十五年間で七七五〇万円の事業費を予算化した。この時農林省山林局長だった村上龍太郎[4]は、「この事業は単なる土木事業ではなく、国民の生命と財産を守り、産業を興すための重要な事業であることを、国民に徹底理解させなければならない」と述べ、さらに「緑の栄える国は栄え、緑を失う国は、産業も文化も民族も亡びる。森林治水事業実施を機に国民の啓蒙につとめ、でき得れば国民運動の形にまでもってゆきたい」と考えていたという。

そこで国民運動推進のため、大日本連合青年団理事長の香坂昌康[5]が村上の主張を受け入れる形で、青年団運動として積極的に実践指導することを決めたのである。

神奈川県がこの事業実現の場として選ばれた理由は、①事業の中心である農林省山林局と大日本連合青年団の所在地（東京）から距離的に近いこと、②当時の神奈川県知事が半井清[6]であったこと、③首都近郊のわりには比較的深い森林地帯を持ち、森林治水事業の量も場所も多かったこと、などをあげている。

以上のような経緯で、国民運動推進計画が農林省から神奈川県に持ち込まれたのである。

早速、半井知事は林務課長と社会教育課長に実施案の作成を命じた。ところが、この事業は両課にまたがる内容であり、どちらを主管課とするかが大きな問題となった。結局事業の現場が山林であることと予算や職員の点から林務課を主管課とし、参加する青少年の選出に社会教育課が協力することになった。実際に丹沢報国寮長である宮沢敏雄の辞令は、農林技手兼社会教育主事補の職名で、林務課勤務、社会教育課兼務（煤ケ谷村駐在）となっている。林務課主導で報国寮事業が行われたことは、以後毎年の予算請求を林務課単独で行っていることからも明らかである。そして、教育側の関わりは補助的な立場に留まり、そのためか、神奈川県立教育センター編『神奈川県教育史　通史編下巻』（七九年）にも、報国寮に関する記述は一切ない。

さて、森林治水事業を主とする青年の勤労奉仕運動は、神奈川県において報国寮事業として動き始めた。その後、農林省山林局、大日本連合青年団からの働きかけで、長野県や愛知県でもそれぞれの県の実情に応じた企画と方法で実施されたが、神奈川県のような規模や体制には遠く及ばなかったという。[7]

五　各報国寮の状況

1　丹沢報国寮

丹沢報国寮　本県最初の報国寮である丹沢報国寮は、一九三七年（昭和十二）度事業として予算化され、中郡東秦野村寺山（現、秦野市寺山）に、三七年十月一日開所した。当時の施設は、木造平屋建

トタン葺の寮舎（八〇坪二合五勺）と木造スレート葺の講堂（二五坪七合五勺）があった。それに、木造松皮葺の炊事場・洗面所・便所と渡廊下があった。残念ながら寮舎内部の間取り図は、現在まで発見されていない。寮舎の建築費は三七七六円、講堂は三九年五月十五日に高松宮家から有栖川宮記念厚生資金の助成を受け、総額五八〇〇円で建築された。

職員は時期によって変遷があったようだが、三九年七月三十一日現在、農林技師一名、農林技手兼社会教育主事補一名、農林主事補一名、林業助手五名、炊事夫二名の編成であった。[8] さらに林業助手については、四〇年度に八名まで増員する予定だった。

次に三七年九月三日付で県から市町村長と青年団長宛に出された「丹沢報国寮勤労奉仕ニ関スル件」[9]からその趣旨を引用しよう。それによると、「国民生活ノ安定ト殖産興業ノ根本タル森林治水事業ノ一部ヲ県下青年ニ担当セシメ以テ災害復旧、洪水防止、水源涵養、等国力ノ進展ニ寄与スルト共ニ、青年ヲシテ献身報国、率先シテ救難ニ赴クベキ真ノ精神訓化ニ資セントスルモノニ有之候」としており、実践と教化の一石二鳥を狙った事業であることがわかる。

さらに右記の文書と同時に出された「丹沢報国寮勤労奉仕実施要綱」には、一回あたりの入寮人員は三十名で、十八歳以上の男子、期間十日、実施時期は毎年四月から十一月までで、月二回実施されたとある。

指導方針　初代寮長宮沢敏雄が青少年の指導に当たるに際して、次の四点を指導方針としている。[10]

○治山事業をはじめ生きた山林事業そのものと青年の育成訓練を一つに結びつけて実施する。

○常に寮長をはじめ職員が先頭に立って万事をリードする。

○さらに青年の積極的な自発行動を尊重するよう心掛ける。

○広々とした大自然のなかで若者らしく精一杯に自分の力に自ら挑むことができるようにもっていく。

現代の学校ならば、さながら大自然の中で行われる林間学校とでも言える行事かもしれない。しかし、実態はそんな甘いものではなかった。

日課　日課は、第一日は午後一時までに報国寮に到着して、合宿準備や座談会を行う。第二日から作業となり、午前四時半起床、五時半朝食、六時出発、午後五時半帰寮、六時夕食、七時半入浴、座談会・講話、九時就寝となり、第九日までこの日程で進み、最終日は午前四時半起床、正午解散となる。この間、食事・休憩・入浴の時以外は、体操・禊（みそぎ）・神前行事・集団ゲームなども盛り込まれる過密なスケジュールであった。

作業　作業の内容は、森林治水作業の全般にわたり、およそ二十種類あった。

1 洗砂・洗砂利・同運搬
2 礫採掘・運搬
3 護岸工堰堤工の床掘
4 同積石運搬
5 同中詰・裏詰作業
6 セメント運搬
7 コンクリート練・運搬
8 採土運搬
9 法切
10 階段切り
11 萱植え苗木植付
12 山腹石積工

13石筋工
14水路張石採掘・運搬
15萱採取・植付
16造林地植付
17下草除伐
18炭材運搬
19炭材木炭の窯への入出
20炭俵運搬
21薪とり
22経路修理

事業対象　丹沢が受け入れたグループは、主に県内各青年団と県内五地区女子青年団であった。それと各工場の青年隊である。参加した工場は、日本鋼管・富士電機・東芝・芝浦タービン・富士自動車・いすず自動車・東京自動車・東京螺子など、いずれも県内を代表する工場ばかりである。その他、青年学校職員や産業組合職員、全国営林署職員、そして大学生であった。丹沢への入寮者は、開所以来四三年七月末日現在で、計九十三回、二七八〇余名を数える。[11]

一方、学校生徒の報国寮事業への参加も重要検討課題とされ、三七年六月から厚木中学校（現、県立厚木高校）・吉田島農林学校（現、県立吉田島農林高校）・鎌倉師範学校（現、横浜国立大学教育学部）の三校で試行を行い、その成果をもとに箱根報国寮が設置された。また、前述の通り女子青年団の受け入れも丹沢で行われていたが、女子専門の報国寮新設も必要であると判定され、四〇年度予算で綾瀬報国寮が設置されることになった。

入寮体験　丹沢での体験については、三八年に入寮した和田正洲の記録がある。[12]以下、やや長くなるが抄出して紹介しよう。

筆者が報国寮に行ったのは、國學院の予科一年の夏であった。（略）なぜ筆者が参加したかといえば、父の強引なすすめによるものであった。当時父は横浜市社会教育課長のため、報国寮に出す人員の員数合わせをしたかったらしい。

（略）それ故横浜市の青年団からの希望者が少なかったか、一人くらいは学生を入れておこうとしたかどちらかであろう。

希望が実際上は少なかったのではないかというのは、入寮してから聞くと、本心から参加したのは僅かで、多くは付き合い上致し方なく参加した、というより嫌々ながら参加したというのが実情であった。それは仲間の話によると、報国寮の生活は軍隊と同じという噂が流れていたらしい。筆者は否も応もなかった。第一そんな情報は全く知らなかった。

そして青年団選出の仲間に投入されたのですべて商店か、農家、工場などに働く若い衆で、いわゆる青白きインテリは（当時旧制専門学校、大学の学生は人数も少なく、一般にそう思われていた）、筆者一人であったので心細いことはこの上もなかった。（略）

さて作業である。筆者は今、年をとっているからいつもその時間に起きているが、その頃朝四時半の起床はつらく、ことに横浜の青年団員は、結構贅沢をしていたらしく、食事はのどに通らず、また起きるのもやっとというのが多かった。

食事はこの上なく貧しく、麦飯であり（麦飯は消化がよいので空腹になるのが早い）、一汁一菜であったと思う。この中で今でも覚

えているのは、南京豆の味噌汁で、南京豆の食べ方にこんな方法があるのかと、味はともかくとして感心したものであった。またこのような食事で毎日過ごす寮長始め職員に敬服したものであった。

（略）定刻には作業に出発、治水用具であるつるはし、シャベル、もっこなどを持ち隊を組んでいく。（略）

現地に着くと、そこは大きな岩石が、ごろごろころがっている沢であったり、丹沢山の急傾斜であったりした。そこで終日つるはしをふるい、シャベルで穴を掘り、もっこを担いで大石を運ぶ。これを連日やるのだから三日目になると小便が血のように赤くなった。

毎日だれもふらふらで起き、ふらふらで作業し、ぐったりして帰ると、夕食、講話となる。それで中には脱走しようかというものもいたが、当時のことなので、隔離された山中を脱出できるか不明であり、熊も恐ろしいと休憩時間に雑談しているものもいた。（略）

それでも血の色の小便をした翌日からは慣れたのか、それもなくなり、何とか十日間を務め上げたのである。（略）

終了式のとき、寮長が「まさか君が最後まで残るとは思っていなかった」というのを聞いたとき、筆者としては「青白きインテリ」と、当時半ば蔑まれていた学生仲間の意地を通したという無邪気な思いもあった。

「林政史」（『神奈川の林政史』引用者注）に十九回生の感想録が載せてあるが、われわれの時も多分書かされたと思う。当時このような場では「立て前」を書くものだという習慣がついていた。本心をそのまま書けば、何が起こるか分からぬという不安を皆持っていたのを覚えている。

逆にいえば現場の指導員の林業に対する熱意は別として、勤労奉仕に名を借りた戦闘員訓練所であったのである。軍備を禁止されていたドイツの、訓練され組織化されたアルバイトディーンストが、号令一呵、シャベルを軍隊式に担いだり、おろしたりして、いつでも再軍備可能なことを誇示していたニュース映画を思い出したりした。

「林政史」の感想は、この他箱根報国寮のものも載っているが、どれも滅私奉公という思想統一の成果を誇り、国民精神涵養的な内容が主となっており、治山治水が本来の目的である筈の内容は、むしろつけたりにすぎず、この面からみても報国寮が時局に利用された施設であったことを如実に示しているのである。

体験した作業内容などは、次に取り上げる箱根報国寮とほぼ同じだが、当人の参加の経緯が興味深い。丹沢の場合、員数合わせが必要だったことは大変面白い事実である。また、年齢差や本人の弁の通りインテリであることからくるのだろうか、寮での生活に対する認識が非常にさめていることが特徴である。もちろん戦後の回想である点は割り引かねばならない。

青年学校との関係

丹沢報国寮に入寮した最も多くの団体は青年団であったが、彼らは青年学校生徒でもあった。このため、入寮期間中に、青年学校で本来受けるべき教授・訓練科目については、これを履修したものと見なすよう各青年学校長宛に、四〇年三月二十六日付の学務部長通知が出されている[13]。これは、勤労奉仕作業への参加が多くなるにつれて、作業参加と青年学校の授業とが競合することから、生徒の不利益を救済するために取られた措置である。ちなみに、この通知で指定された事業は丹沢報国寮勤労作業の他に、愛国開墾・興亜

青年勤労報国隊勤労作業・木炭増産勤労報国作業である。

2 箱根報国寮

箱根報国寮

箱根報国寮は神奈川県二番目の報国寮として、三八年、足柄下郡湯本町大字畑宿（現、箱根町畑宿）に開設された。畑宿には、今も箱根報国寮の跡地がそのまま残っている。建物はないが、石垣積みで造成された三段の平場があり、駐車場や建設会社の資材置き場などになっている。

かつて最上段に講堂（道場）があり、中段には事務室や班室の入る寮舎が建てられ、下段には物置、国旗掲揚台と、体操などが行われた寮庭があった（箱根報国寮配置図参照）。

その位置は、現在の畑宿集落の西はずれに当たり、畑宿バス停から金指寄せ木工芸館の前を芦ノ湖方面に少しのぼった右手である（地図参照）。

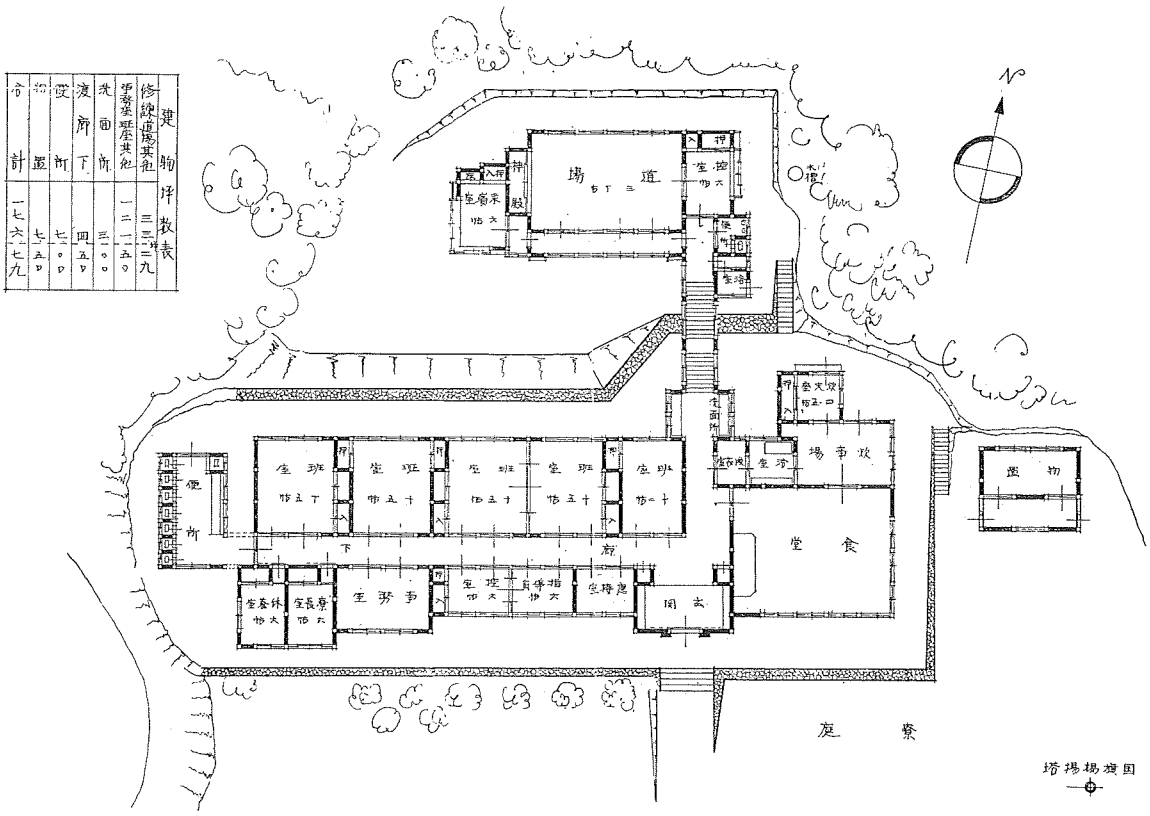
職員は寮長一名と林業助手五名を合わせて六名の体制であった。

入寮対象者は、県下中等学校以上の学校報国団員で、一回当たり五十名の定員。一回の入寮期間は七日間で、月に三回、年間三十回実施する予定で、毎年一五〇〇名の入寮を見積もっていた。入寮期間は丹沢報国寮に比べて三日間減らされている。おそらく若年の生徒に対する配慮であろう。

開寮式は、三八年七月十日に挙行され、当日第一回の入寮生として横浜高等商業学校（現、横浜国立大学経済学部）の生徒が入寮した。

施設

施設の中心である寮舎は、事務室と班室が入る木造トタン葺建物（一四三坪五合、写真1）で、丹沢報国寮に比べると一回り大きかった。建築費は、八七〇〇円。東西に細長い建物で、内部の間取りは、中央の廊下を挟んで北側に五つの班室（四室が十五畳で、一室が十二畳）



箱根報国寮配置図

が東西に並び、廊下の南側に応接室・指導員控室・事務室・寮長室・休養室がある。建物西側には便所があり、東側には食堂・炊事場・浴室・脱衣室・炊夫室があった。丹沢報国寮と同じく、四〇年五月十六日に高松宮家から講堂建設のため有栖川宮記念厚生資金二〇〇〇円の助成を受け、総額九七〇〇円で新築され、翌年七月八日、三三坪二合九勺の講堂として落成している。この講堂は配置図では、「道場」と注記されている。寮舎から渡廊下を通って階段を上ると、右手に浴室と便所があり、その先に六畳の控室と三十畳の道場がある。道場西側には神殿が設けられている。神殿の裏側に床の間付きの来賓室（六畳）があったが、これは丹沢にはなかった。

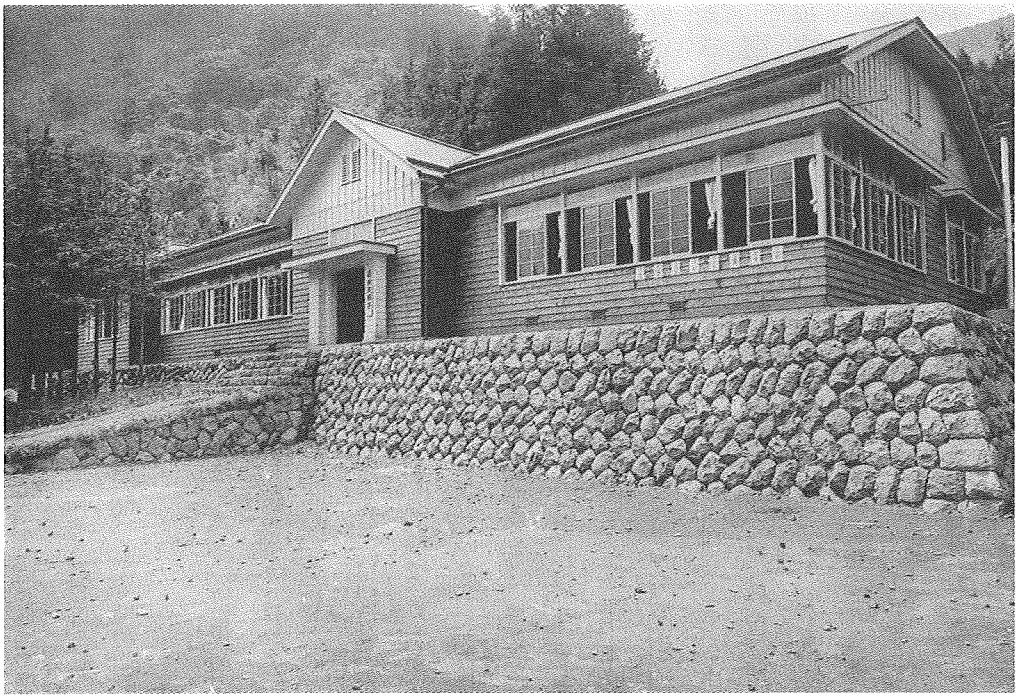
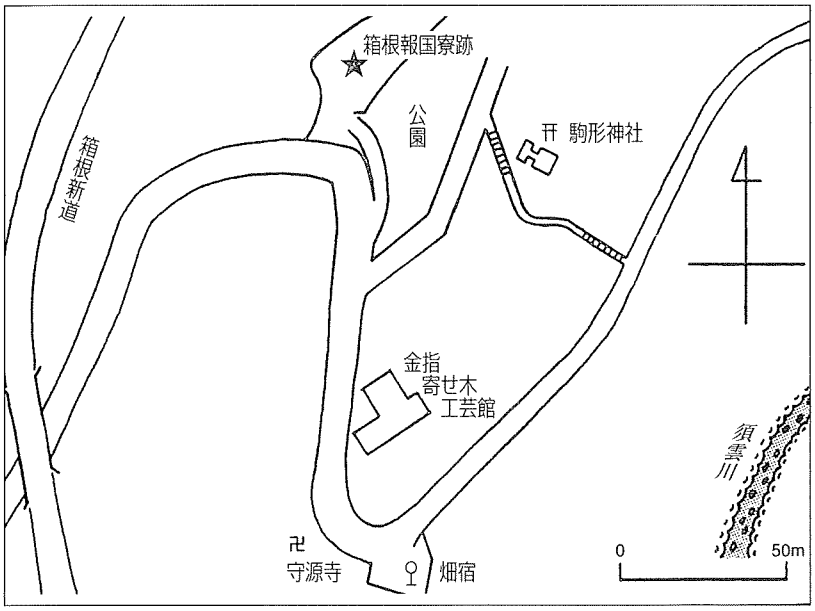


写真1　箱根報国寮寮舎全景（『箱根報国寮絵葉書』より）



地図　箱根報国寮　（作図：渡辺充）

寮舎と講堂の建築費を比較すると、寮舎の坪単価が六十一円であるのに対して、講堂は二九四円で、講堂には約五倍の費用をかけていることがわかる。その理由については、後段で紹介する『修養録』に記されている通り、建築段階から高松宮の視察（四二年五月二十日）を想定していたものと思われる。

日課　日課は丹沢報国寮とほぼ同じで、勤労作業の内容も同一である。現場での作業が中心であることは勿論だが、精神教育も非常に重視している。例えば、毎朝五時から六時十分まで行われる「朝の行事」では、点呼に始まり、国旗掲揚・国歌斉唱・宮城遙拝・体操（建国体操・木剣体操）・冷水摩擦・駆足・静座で終わる。また夕食後の六時から八時までは、自習（学習）及び訓話・講話・座談会・娯楽（集団ゲーム）・静座が行われる。現在の学校で行われる林間学校などの行事と比べると、非常に厳しい合宿生活だったことがわかる。これに加えて重労働である勤労作業が終日行われるのだから、よほど体力に自信がある者でなければ参加できないものだったのである。

寮生活　神奈川県立横浜第三中学校（現、県立横浜緑ヶ丘高校）は、箱根報国寮に三八年から毎年生徒を送り込んでいる。寮での生活について、体験者から聞き取った記録があるので紹介しよう。[14]

○入寮者五十名は、五班に分かれて各室に入った。
○部屋はベニヤ板で隣室と仕切られていた。
○部屋ごとに棚と押入があり、押入には寝具と作業用のリュックサックが入っている。
○部屋の壁には班旗と称する旗が掲げられていて、部屋の出入りには班旗に向かって敬礼をしなければならない。
○寮服は青年団服のようなもの。
○朝夕の食事は講堂でとる。
○炊事当番は炊事夫とともに食事の準備をする。
○食事の前には、黙想・敬礼と続き、寮長の音頭で食事訓を唱える。
○食事は一汁一菜で食事中の私語は禁止。お湯は湯呑みに一杯限り。

『修養録』　箱根報国寮発行の『修養録』という小冊子がある。[15] この冊子は、報国寮設立と同時に編集・発行されていたものと考えられるが、ここで紹介するものは、四二年五月二十日に行われた高松宮の箱根報国寮視察を記念して再編集されたものである。発行年月日は記されていないが、沿革の最後の記事が、四二年六月十日の戸田侍従差遣（さけん）なので、この日以降と考えられる。

内容は、全一三一頁で、教育勅語などの詔勅類や御製、唱歌などの忠君愛国思想に関する記事が大部分を占める。林業については、ごく一部が割かれているに過ぎない。そして、高松宮視察に際して特別に編成された入寮生による「県下中等学校生徒特別訓練箱根報国寮入寮生感想録」がある。

次にこの入寮者の感想文を紹介する。全部で十名分収録されているが、その内容は似通っている。長くなるが冒頭に掲載された一編を紹介しよう。

県立横浜第一中学校　五年生（氏名略）

感激の中に五日間は音もなく過ぎ去つてしまった。僕等は何たる幸福な者だらう。此の聖代に生を享けたる我が喜は胸中に満ち溢れ日本人として東洋人として世界人として身命を擲つて八紘一宇の御精神にそひ以て人類の福祉を増進し森羅万象生きとし生ける者の長たる人間としての本分を盡さん事を誓つた。僕等五十名の感激は涙

なくして何であつたであらう。座談会に或は班室に於て皆感激し益々君国に盡さん事を誓つた。此の度各校代表が五十名箱根報国寮に期せずして会した。其の上　高松宮殿下の台臨を仰きて更に僕等は感激し日本の国に生を享けた事に感謝した。

かような御仁慈により僕等は更に肝銘する所大なるものがあつた。僕等第一班の者はセメント運びをした。僕は生れて初めての重いものを背負つた。僕は前棒であつた。三十米位行くと肩がメリメリいふ。僕はボーッとして何だかボヤとしてしまふ。所謂夢中になつてしまふ。丁度その時後の方で「よいしよ」と声がするやうに聞える。しかし自分には何だかハッキリわからない自分の体をもつて上るだけでも容易ではない自分が、まして五十瓩ものセメントをかついだのだからたまらない、頭はボーッとする、体はフラフラする、肩はメリメリいふ、しかしどうにか運べた。自分一人ではいや僕等の同級生となら後で運べなかつたろうと考へた。母校の名誉にかけても是非運ばなければならぬと思つた。校長は僕等を呼んで話された。神中の名誉を汚さずにやつてくれと、一回セメントを運んだだけで僕はクタクタになつてしまつた。二回目を運ぶ時になつたらどうしてもかつげない、後棒の師範生が「さあ行かう。よいしよ」と言ふが僕は何とも言へない気がして師範生の顔がうらめしくなつてきた。僕等は心の持ち方次第で身体を如何様にも動かし得るといふ信念を完全に心に滲み込ませた。日本人たるものそれが正しいと確信したことを死んでもなす、必勝必滅の信念は日本人の特徴であると聞かされた。僕もその信念をもてるやうになつた。再度入寮の僕等の心は日本精神に燃えてゐる。何をするにも皆国家の長である。それでこそ僕等は僕等としての国家への奉仕が出来るのであると思つた。

殿下の台臨は僕等に広大にして深遠なる日本人としての自覚をはつきりと心に描き出して下さつた。あの峻険なる渓谷の道を……僕等はただ頭がさがるばかりである。その上僕等の作業をつぶさに視察せられその御雄姿を拝した時僕等は何ものをも考へない荘厳さに打たれた。此の気持ちは日本人ならでは味ひ得ない。僕はただ何とも言へない一種の異様な感に打たれた。自分はそれを言葉に表し得ない。文筆に盡し得ない。心胸に秘めて七生迄も忘れ得ないこの感激を。春移り秋になり一年過ぎ二年過ぎても何時までも此の感激は、自分にある一つの事を表現する語彙がない。心と筆との差は大である。日本人としての此の喜びに包まれて。

御民われ生けるしるしあり天地の
　　栄えゆる時にあへらく思へば
君がため何か惜しまん若桜
　　散って甲斐ある命なりせば

県立横浜第一中学校は、現在の県立希望ヶ丘高校のことで、当時も今も県内トップクラスのエリート校である。現在の高校二年生に相当する年齢だが、現代の高校生にこのような文章が書けるだろうか。

内容には、あまり個性が感じられない。丹沢報国寮の和田は「立て前」と書いたが、中学生本人にはそのような意識は微塵もなかったに違いないが、現代から見ると結果としてそう受け取られても仕方がないほど、非常にステレオタイプで、他の感想文の内容と酷似している。

その反面、作業の辛さは正直に告白している。五〇キロのセメントは、さぞ重かっただろう。気になるのは、この文章のどこを探しても、「林業」について書かれていない。林業振興という報国寮の目標は、彼らの

脳裏には刷り込まれなかったのだろうか。寮での講話などでは、そのような話もあったはずだが。

入寮単位　箱根での入寮単位は基本的に学校単位であった。例外としていくつかの学校から代表が集まって、合同で実施される例もあった。

前掲『修養録』所収「県下中等学校生徒特別訓練箱根報国寮入寮生感想録」で感想文を書いているのは、県立横浜第一中学校・県立横浜第三中学校・県立厚木中学校・県立湘南中学校（現、県立湘南高校）・県立川崎中学校（現、県立川崎高校）・県立横須賀中学校（現、県立横須賀高校）・県立平塚農業学校（現、県立平塚農業高校）・県立吉田島農林学校・県立工業学校（現、県立神奈川工業高校）の生徒たちで、高松宮視察のために特別編成されたグループだった。

県立横浜第三中学校では、三八年から四四年まで毎年箱根に生徒を送り込んでいる（四一年のみ史料欠のため不明）[16]が、三八年から四〇年までは五年生が、四二年から四四年までは四年生が入寮している。入寮者の人選は、希望者を募ったりクジ引きで選んだようだ。ただ希望者が定員に満たなかった場合は、半ば強制的に指名されることもあった。ところが、四四年は四年四組がクラス単位で入寮している。これは、四年四組が軍人志望者を集めた軍人クラスで、「軍の学校での生活の準備教育として十分意味がある」ということだったらしい。このことは、後掲する商工実習学校の聞き取りにも出てくることである。

それから、横浜市立横浜商業学校（現、市立横浜商業高校）[17]では、箱根報国寮に派遣する生徒は、成績を第一として総合的に人物を評価して選考された。

県立横浜第一中学校では、三九年七月に四年生が箱根に入寮している[18]が、興味深いことに残留組の事が紹介されている。それによると、街路樹の手入れと農事手伝い、そして野外教練が行われている。箱根組の合宿七日間に対し、残留組は自宅からの四日間である。不公平は明らかだが、当時の生徒達がどのように考えたかはわからない。

四三年七月末現在で、合計一二三回実施され、約六五〇〇名が入寮している。

入寮体験　それでは箱根報国寮入寮者の体験を紹介しよう。北見卓爾・梅田久夫・前田享太郎の三名は、県立商工実習学校（現、県立商工高校）の三年生だった四三年二月に、入寮している[19]。

〜みなさんが箱根報国寮に行かれたのはいつですか。

北見　昭和十八（一九四三）年の二月十一日から十七日まで、六泊七日ですね【写真2】。商工実習は、商業科が一学年A・B二クラスで各五十人いたんですよ。全部で百人のうち五十人だけが選抜されて参加したんです。どういう基準で選んだかは判らないんですがね。

前田　まあ体の丈夫な連中ということですね。だから、ここへ来なかった人たちは、何となく体の弱い人でした。それで、報国寮へ行った組と、行かなかった組に別れたんですよね。

北見　その後、クラス替えがあったんですよ。報国寮が二月ですから、四月になると当然四年生になるわけでしょう。その時にねえ。報国寮へ行ったクラスと行かないクラスとに分かれちゃったんですよ。三年生まで仲良くやってきた人たちと、入れ替わっちゃったんです。私たちは二十一回生ですが、クラス替えをやったのは、商工実習学校の長い歴史の中で、この時が最初で最後だったらしいんで

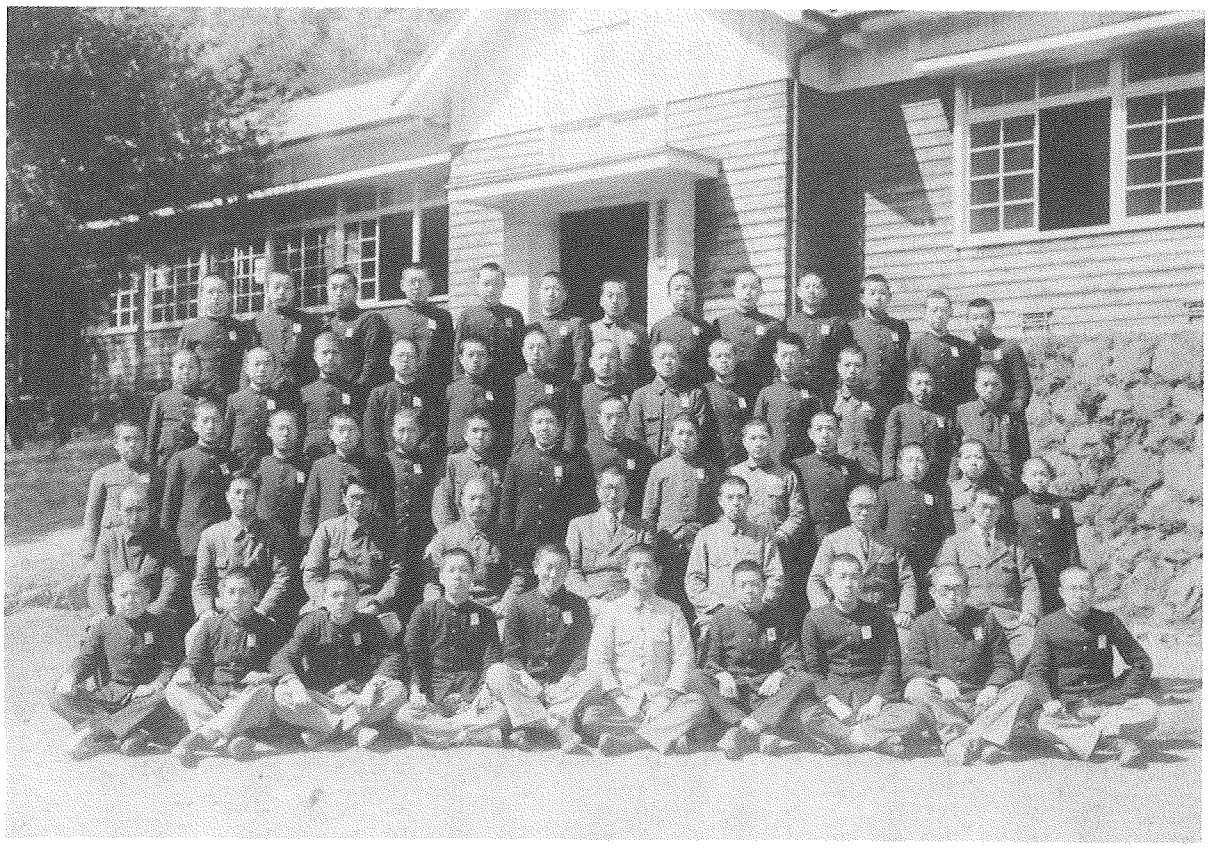


写真２　1943年２月、県立商工実習学校３年生（北見卓爾氏提供）

す。

〜クラス替えというのは普通はやらないんですか。

梅田　そうです。普通は一年から五年までね。ところが、箱根報国寮へ行ったためにクラス替えをやったんです。

北見　それでね、箱根報国寮の裏番組というのがあって、行かなかった人たちが、蒔田（現、横浜市南区蒔田）のお寺へ行かされたんですよ。

〜そこへ行って何をやったんでしょうか。

梅田　精神修養。

北見　そこへ行った人たちは、かなり怒っていたらしい。

〜この五十人というのは、どういう理由からでしょうか。

北見　これは報国寮の収容人員かもしれない。私たちが行った時には、ほかの学校はどこも来ていなかったね。

〜報国寮の建物はどんな感じでしたか。

梅田　上に校舎が、下に運動場がありました。国旗掲揚塔もあって、そこで朝晩、国旗掲揚をやりました。

〜建物の内部はどうでしたか。

梅田　今考えてみると、陸軍の兵舎みたいな造りだね。まあ内務班のようなものだね。この班には、分隊長みたいな人がいて。あの時は二班で二十五人ずつ二部屋だった。教官は、ひとりは細い人で、ひとりはごっつい顔の熊みたいな人だったね。

北見　職員は寮長さんを含めて五人だった。ごっつい人は、みんな山男って呼んでいたね。山の仕事をするからね。

〜先生も一緒に行かれたんですか。

北見　行きましたよ。商工実習の先生は、学校長とそれからあと

二名行きました。ひとりは野球部の部長さん。もうひとりは我々が教わった数学の先生。当時、担任の先生は主任と言っていましたが、この頃は、もう兵隊に行かれていました。

〜寮の場所はどの辺りでしょうか。

梅田　畑宿の集落のちょっとはずれというか、上というか。

〜報国寮まではどうやって行ったんですか。

北見　湯本まで箱根登山鉄道で行って、湯本から徒歩で一時間くらいかかりました。早雲寺の前の旧街道をずっと行ったんです。

前田　眼下に川（須雲川）が流れていました。

〜二月に実際に行かれるまでに、箱根報国寮というものをご存じでしたか。

北見　先輩も行っていますからね。話には聞いていましたよ。今度は自分たちの番だということで。

前田　仕事の内容は、伐採が主だったですね。

北見　それと堰堤って言うんですか。その石組の石を運びましたね。モッコに入れて天秤で二人で担いで。そういうのを私なんかはやりましたね。色々仕事の分担があったと思いますよ。

前田　私は小さかったから、食糧の買い出しが多かった。

〜建物について、他に覚えている事はありませんか。

北見　建物は板張ですね。それで、黒光りしていましたね。あんまりきれいじゃなくて、古めかしい感じでしたね。

梅田　部屋は学校の教室みたいなものです。そこに布団を敷いて、寝起きしていたんだ。朝起きるとね、下の運動場へ行ってね、体操をさせられて、それから座禅だよ。

北見　もちろん掃除もやるんだよ。

〜寮での様子を伺いたいのですが。食事はどうでしたか。先ほど買い出しというお話でしたが、自炊ではないですよね。

梅田　炊事の人はいたんだよね。

北見　買い出しは私も湯本まで行きましたよ。行きは楽なんですが、帰りは菜っ葉や大根を背負ってくるから、大変だった。

梅田　食糧事情はまだそれほど厳しくはなかった。でも真っ白いご飯じゃなかったような気がする。玄米食か七分つきというところかな。

北見　家で食べてるご飯とは違っていた。だから軍隊で食べるようなご飯かな。

〜食費などの費用はどうなっていましたか。

北見　払ってもいないし、貰ってもいない。おそらく県が出したんでしょう。

梅田　勤労奉仕と心身鍛練という目的があって、そして心身鍛練が主だったんじゃないでしょうか。

北見　箱根報国寮というけれども、私たちでは精神道場という言い方をしていたような気もするんですが。

前田　そういった感じがあったね。

北見　私は今でも思うんですけどね。確かに治水・治山という仕事もやったし、体も鍛えていましたが、その根底には、精神的な道場という考え方があったと感じています。この頃は、相当戦争も厳しくなっていますね。大学生も学徒出陣で行ってますが、そろそろ次の段階として、中学生を戦争に駆り立てようという下心があって、その準備として鍛えていこうと。

梅田　それは多分にあったと思いますよ。

北見　名目は治水・治山でも、実は戦争に動員するということが、根底にあったんだと思いますよ。それで、先ほどの話ですが、百人の中からピックアップして、体の丈夫そうな、将来軍隊に行けそうな生徒を鍛えようってね。

結局、そのあとの学校ではそういう教育方針がありました。報国寮へ行ったものは、どうのこうのとね。君たちは報国寮へ行って体を鍛えたんだから。

梅田　商工実習は、割とやることは軍隊調だったから。

北見　お国のためというようなね。ひとつのレールが敷かれたような気がしましたね。もちろん、報国寮に行く前にそんな話はないですよ。箱根報国寮という精神道場があって、そこへ行くということでね。でも、帰ってきてからは、そういうふうな見方（軍隊へ行くという）がありましたね。

というのはね、私は調べてみたんですけれども、報国寮へ行った五十人のうちから、在校中に三十二人も軍隊に行っているんですよ。これは驚くべき数字ですよ。しかも残った者は全部、前田さんをはじめ、軍需工場へ動員されたのです。前田さんの話を聞くと、普通の兵隊と同じような扱いを受けたそうです。

〜報国寮組五十人のうちから三十二人だとすると、残された五十人からは、当然割合が減っているのでしょうか。

北見　減っていますね。だから、その人たちの中からは、昭和二十年になって現役で入隊している人がいます。結局、徴兵年齢が一年繰り上がったのですね。それで七人くらい現役で行っています。

〜そうすると、この三十二人というのは、皆さん現役前ということですね。

北見　そう、志願で行っているんです。自分から進んで行った人もいるし、勧められて行った人もいます。学校がそういう雰囲気というか、ムードだったんですね。実業学校だから殆ど上の学校に行かないんです。ですから普通科の中学校よりも多く軍隊に行っているよね。

梅田　そうだね。多いよね。

北見　県にそういう目的があったかどうかは、判りませんけども、どうもそのへんのところがね、うちの学校の指導がね。

梅田　七割行っちゃう。

北見　当時の校長先生とか、部長先生とかがね、相当右寄りだったんですね。でも、後から考えると実業学校は多かったと思います。そういう指導があったんだと思います。

梅田　そうですね。ですから例えば、この学校からは（軍隊に）何名が行ったということが、配属将校の手柄になったのでしょう。

〜今までこうした実業学校の状況についてはあまりよく判らなかったと思います。実業学校から徴兵前に志願して、これだけたくさんの人たちが軍隊に行っているのをみると、普通科の中学校との違いはどうだったのでしょうか。

梅田　そうですね。例えば二中（翠嵐）や三中（緑ヶ丘）がどのくらいだったか。でもやっぱり、配属将校によると思うよ。

北見　うちの学校はね、商業科が二クラス、あとは機械科・電気科・応用化学科があったんですよ。ところが、商業科がなくなっちゃったんですよ。戦争中は商業科はいらないってね。だから、商業科の人が工業科に行ったりしてね。そのへんも、学校の方針がおかしいんだよね。県の方針でそうなったのかねえ。

〜それは全国的なことだったようです。そのほか、寮で印象深かったことは何かありませんか。

北見　山火事があったんですよ。これが大変だった。寮のすぐ上のところで、火事が起きちゃったんだ。今日でもう帰れると思った思った日だったから、やれうれしやと思っていたんだ。そしたら、山火事だぁ〜というわけですよ。それ支度しろってんで。山だから水掛けるわけにいかないから、木の枝で叩くんだ。

〜そのほかに、当時の学校生活で何かありませんか。

梅田　報国寮へ行ったことのほかには、体力検定というものね。その体力検定で、初級・中級・上級のバッジがあって、それを付けるということが、ひとつの優越感があって。バッジは金鵄勲章の小さい奴だった。それが金・銀・銅なんだよ。

北見　箱根報国寮もそうですよ。参加者にはオムスビ型の箱根細工でできたバッジをくれるんですよ。それを、誇らしげに襟元につけてね。

梅田　そうした感覚を徐々に煽り立てて、最後には兵隊だね。

北見　体力検定なども完全に軍隊調だったよ。もちろん、長距離走・短距離走などありましたが、重量運搬や手榴弾投げなんてあった。手榴弾なんてまさに軍事訓練だった。結局、そういった体力作りも、軍隊のための準備だった。

前田　力が平均していないと、バッジはもらえなかった。どれか一つでも基準に達しないとダメなんだ。初級ももらえない人も多かった。上級を持っていると鼻が高いんだよ。

だから、こうしたことには全て下地があって、小さい子供が伐採に行っても大して役に立たないんですよ。でも、これから将来のことを考えて鍛えておこうというのが、当時の考え方だった。それで、皆が兵隊に志願してくれれば良かったんだ。報国寮はまさに戦争のための施設だったんだ。

学校の方針も、僕らが報国寮に行った時期を境にして、大きく変わったと思うんです。

（一九九六年八月二十三日）

当時、選抜されたことを誇りに思い、母校の名誉を背負って真面目に作業に取り組んだ姿と、現代から当時を振り返って見た客観的な感想の対比が興味深い。報国寮が戦争のための施設だったという体験者自身の言葉には重みがある。

勤労記念章　勤労作業を終了した者には、退寮時にオムスビ型で箱根細工製の勤労記念章を交付することになっていた。右の商工実習学校生徒の聞き取りでも、記念章をとても大切にしていたことがわかる。

記念章については、後掲する綾瀬報国寮の入寮生が現在でも大切に保存していて、筆者も初めて実見することができた【写真14】。

『箱根報国寮絵葉書』　本節最後に、『箱根報国寮絵葉書』[20]を紹介しておこう。この絵葉書は八葉の絵葉書から成っており、撮影が桜木良平、編集は箱根報国寮である。入寮生の土産物として製作・販売された可能性もあるが、定価などが記されておらず詳細は不明である。

八葉の絵葉書【写真3〜10】の内容は表の通りであるが、そこで気がついた点を述べると、まず写真3には、

指導精神
一、国体観念ノ徹底
一、勤労報国信念ノ培養
一、実践躬行主義ノ強調

寮訓
一、至誠奉公
一、質実剛健
一、規律節制

という標語が記されているが、ここには林業の文字がない。従って、報国寮事業の主目的が、勤労奉仕による心身鍛練と国家に忠誠を尽くすための精神修養に一般化されていることがわかる。

写真4に寮舎の全景とともに神奈川県知事半井清の書が載っている。半井を報国寮の創設者として、重視していることがわかる。

写真5に「建国体操」がある。建国体操の普及に半井清が重要な役割を果たしたという事実との関連にも留意する必要がある。[21]

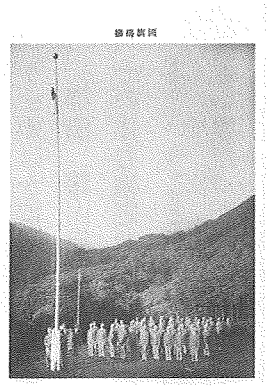


写真3 『箱根報国寮絵葉書』より

写真7には、県有林で下草苅り作業に従事する生徒の姿が写っているが、その中に二本の日章旗が立てられている。何故日章旗が二本もあるのか今まで意味が全くわからなかったのだが、次節で紹介する山本愛子の証言により、入寮者は十名毎に一班をつくり各班に一本ずつの日章旗を支給され、移動や作業中にはこれを立てていたということが判明した。箱根も綾瀬も定員五十名だから五本の日章旗が準備されていたことになる。おそらく全ての報国寮で行われていたのだろう。こうした細かい事実は、公の史料類には全く記されておらず、体験者の証言のみが頼りである。

写真4 『箱根報国寮絵葉書』より

3 綾瀬報国寮

綾瀬報国寮

丹沢での実践を踏まえて、四〇年度予算の新規事業として女子専用の新たな報国寮が設置されることになった。

綾瀬報国寮は女子（高等女学校・女子青年団・婦人団体）を対象とし、四一年三月十日、高座郡綾瀬村深谷大上（現、綾瀬市深谷）の県営綾瀬苗圃内で開所した。開所式には県知事らとともに高松宮家からも来賓が出席している。高松宮家と報国寮が密接な関係を持っていたことは、既に述べた有栖川宮記念厚生資金による丹沢・箱根報国寮講堂建築への助成や、箱根への高松宮視察などで明らかである。

三月十五日から三日間県庁女子青年団員五十名が、続いて十八日から三日間綾瀬村女子青年団員三十名がそれぞれ入所している。[22]それぞれの作業内容は、苗圃内での馬鈴薯の植え付けや荒蕪地の開墾などであった。

計画段階での職員構成[23]は、技師一名・助手二名・嘱託一名と、諸傭として炊事夫一名・雑役夫一名が予定されていたが、開設時の職員[24]は男子

箱根報国寮絵葉書

番号	内　　容　　1	内　　容　　2
写真 3	国旗掲揚	指導精神／寮訓
写真 4	寮全景	神奈川県知事半井清の書「心身鍛練」
写真 5	意気天を衝く建国体操！	箱根神社参拝の途上
写真 6	荒廃林地復旧工事（砂利採集）	堰堤床堀作業
写真 7	県有林下苅作業	
写真 8	雨中に於ける荒廃林地復旧工事（礫并砂利採集）	
写真 9	須雲川既設の堰堤	寮より荒廃林地を望む
写真10	箱根神社参拝	講堂内部

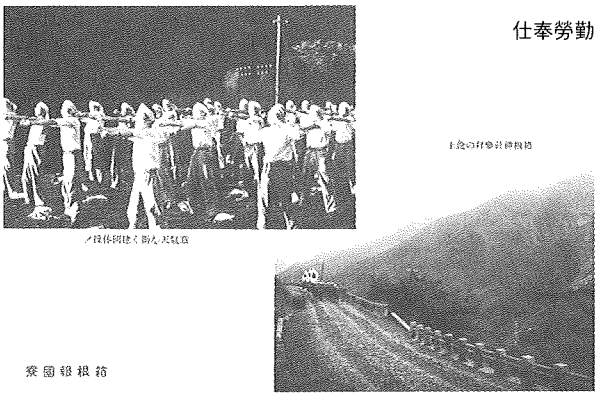


写真 5

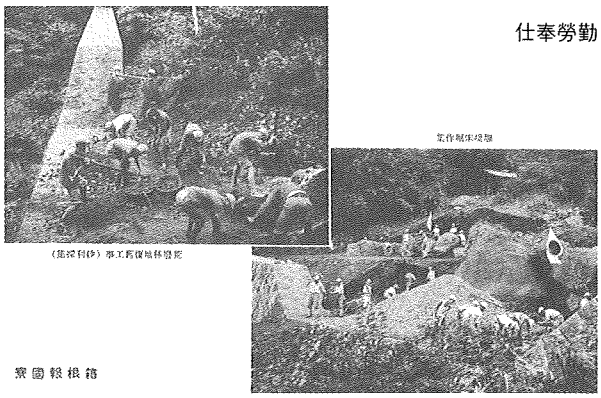


写真 6

写真 7

写真 8

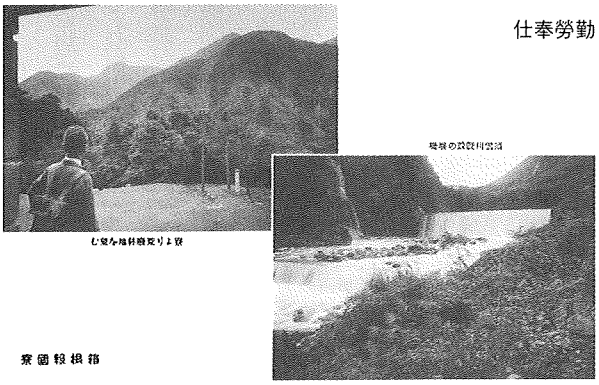


写真 9

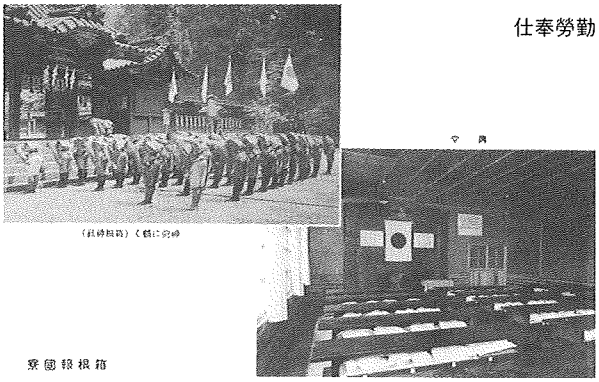


写真10

箱根報国寮絵葉書（筆者蔵）

職員五名、女子職員一名、炊事婦二名の計八名であった。女性職員が増員されているのは、女子施設であることへの県当局の配慮であろう。一回当たりの入寮生は五十名、期間は七日間で、これは箱根と同じだった。

県営綾瀬苗圃　紀元二千六百年記念事業の一環として四〇年に設立されたのが、県営綾瀬苗圃である。ここは、主に県有林に植える檜などの苗木の栽培と育成を行う施設で、敷地の面積は約三十町歩あった。

苗圃は林務課の管轄であったが、設立当初から多数の児童生徒や青年団の勤労奉仕を受け入れている。愛甲農学校（現、県立相原高校）、海老名小学校高等科、御所見（ごしょみ）女子青年団（現、藤沢市御所見）、横浜工業学校（現、市立横浜工業高校）などである。[25]

施設　四〇年度予算調書[26]によると、財産費・勤労奉仕費・女子報国寮費として、三万三三一四円が計上されている。内訳は、職員の俸給・旅費・賞与、その他備品費・消耗品費・雑費などであるが、大部分を占めたのが建物の新営費である。新営費は二万二六二二円で、内訳は建築費に一万七七三六円、設計監督費に八八六円、初度設備費に四〇〇〇円である。施設の中心となる寮舎は、木造平屋建スレート葺（一二五坪七合五勺）で、価格は一万四九四〇円、その他に便所・物置・渡廊下・炊事場・浴槽設備がある。

寮舎の建築費を丹沢・箱根と比較すると、丹沢の坪単価四十七円、箱根の五十九円に対して、綾瀬は一四二円で両報国寮の三倍ほどかかっている。建築された年代は二、三年しか違わないので、理由はよく分からないが女子報国寮のほうが、より丁寧に造られたということだろうか。

初度設備費四〇〇〇円は、寝具六十組・敷布一二〇枚・食器百組・竹箸二百膳・湯呑百組など日用品の購入に充てられた。箱根でも触れた、五本の日章旗も用意されていた。予算書には、国旗（大）一旗（単価五円）、国旗（小）五旗（単価三円）と旗竿（大）一本（単価一円）、旗竿（小）五本（単価五十銭）がそれぞれ計上されている。

講堂　新設当時、綾瀬報国寮には講堂がなかったが、その計画は既に立てられていた。丹沢・箱根報国寮と同様に、有栖川宮記念厚生資金に建築資金助成を申請中だった。ところが、後述するように海軍の用地買収によって報国寮自体が廃止になってしまったため、計画は立ち消えになってしまったのである。

申請に伴う文書類が残されている。[27]簡単な講堂設計図によれば外観はほぼ箱根と同じで、建築費は一万五〇〇〇円の予算に対して三〇〇〇円の助成を希望している。

有栖川宮記念厚生資金は、有栖川宮家の祭祀と資産を継承した高松宮家で事務が行われ、地方社会事業に対して表彰・奨励・助成を行う事業であった。内容を簡単に紹介すると、毎年都道府県知事に対して「農山漁村の社会事業又は地方振興に貢献した個人、団体」の推薦を求めて、その内容により、表彰（銀製花瓶一個）・奨励（金一封）・助成（事業の大小難易により金千円以内を補助、必要があれば増額）を行っていたのである。果たして報国寮が、山村の社会事業や地方振興に貢献するものだったかどうかは疑問だが、実際に二カ所の報国寮の講堂建築に助成が行われ、綾瀬でも助成が実現する可能性はかなり高かったものと思われる。神奈川県にとって、有栖川宮記念厚生資金の助成を受けることは、報国寮と高松宮家との結びつきを強調することができ、報国寮事業の宣伝になったと思われる。

設立の背景　丹沢報国寮でも述べた通り、当初、女子青年団員は丹沢で受け入れられていた。だが、丹沢での作業は若い女性の体

力で対応できにくい重労働であった。総力戦遂行のためには、男女を問わず国家のために奉仕することが求められてはいたが、当時の日本の社会構造からして、女性に男勝りの労働を求めることは本旨ではなかった。そこで女性に相応しい作業内容をもつ新施設が設立されたのである。

作業　施設が県営綾瀬苗圃の構内にあったため、ここでの作業は丹沢や箱根とは異なり、まさに女子作業に適した軽労働であった。内容は檜などの苗木を育てる苗畑作業を中心に、耕耘・除草・床替作業などの農作業のほか、藁細工やモンペの縫製なども取り入れられた。具体的には、次に紹介する山本愛子の証言に詳しい。

入寮体験　ここで綾瀬に入寮体験を持つ、山本愛子の証言を紹介しよう。山本は、県立横須賀高等女学校（現、県立横須賀大津高校）の四年生だった四一年六月に綾瀬報国寮に入寮している[28]。

〜生い立ちからお聞かせ下さい。

山本　大正十四（一九二五）年八月十七日、東京の深川で生まれました。

昭和十三（一九三八）年四月に、神奈川県立横須賀高等女学校に入学し、昭和十七年三月に卒業しました。

〜綾瀬報国寮に行かれた時のことをお話し下さい。

山本　四年生だった昭和十六年の六月に行きました。残念ながら日にちは覚えていません。私は園芸部に所属していたことと、健康で四年間皆勤だったので選ばれたのかもしれません。選抜基準があったのかどうか、よくわかりません【写真11】。

期間は七日間でした。当時、私どもの学校は一学年五クラスでしたが、各クラスから十名ずつ選ばれて、合計五十名が綾瀬報国寮に参りました。往復は学校の制服でした。

引率の先生は、当時、横須賀高女で一番怖かった島津愛三先生と、家庭科の大和マサノ先生のお二人でした。

行く前に大和先生のご指導でモンペを縫いまして、それを作業用に持って参りました。また当時はピケ帽が学校の制帽でしたので、作業中はそれを被り足元は運動靴でした。

〜綾瀬報国寮までどうやって行かれましたか。

山本　京浜急行線に乗って横浜駅まで行き、横浜で神中線（今の相模鉄道線）に乗り換えて相模大塚駅まで参りました。相模大塚駅からは、徒歩で綾瀬報国寮に入りました。寮の周りは見渡す限り畑で、ずいぶん田舎に来たなと思いました。

〜寮での作業内容を教えて下さい。

山本　私どもは日頃から農作業などの経験が全くありませんので、本当に初めての体験でした。でもあの当時の学校ですから、普段の生活も厳しくて、特別大変だったとは思いません。

作業で覚えているのは、じゃがいもの探り掘りです。じゃがいもを今のように全部抜いてしまうのではなく、根元に手を差し込んで、大きいものだけ選んでとって、小さいものはそのまま残すのです。

あとは麦刈りをしました。あれはチクチクしてとても痛かったですね。各班ごとに持ち場を決めてやりました【写真12】。

写真のように日の丸を五本並べて立てて、そこから刈り始めました。

荒れ地の開墾もやりました。

室内でワラ草履作りもやりました。農家のおじさんのような方がいらして、指導して下さいました。

写真11　1941年６月、県立横須賀高等女学校４年生（山本愛子氏提供）

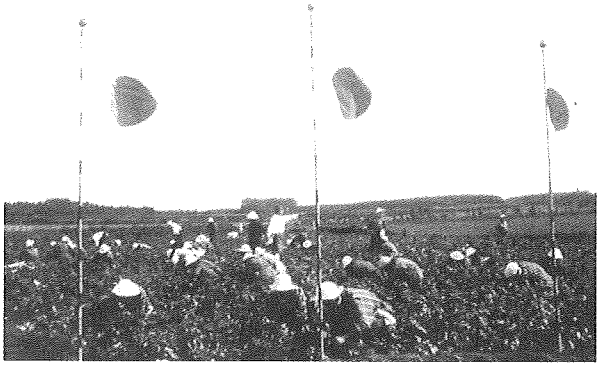


写真12　日の丸を立てて作業する生徒たち（山本愛子氏提供）

～それは雨の日の作業ですか。

山本　いいえ違います。私どもが行った七日間は晴天続きで、雨は降りませんでした。ワラ草履作りは、昼間に室内で行いました。

～そのほか作業中のでき事で、何か印象に残っていることはありませんか。

山本　朝、宿舎から作業に出るときには、隊列を組んで日の丸を先頭に立てて、歌を歌いながら行進しました【写真13】。その歌は、入寮してから歌詞を配られて覚えた歌です。歌詞は写してきたのですが、その後いろいろ調べましたがどうしても題名がわかりません。勤労動員の歌ですかね。

～寮での生活についてお話し下さい。

山本　私は致しませんでしたが、炊事当番を各班より二名出しまして、寮の賄いのおばさんの手伝いをしました。当番をやったお友達が教えてくれたのですが、赤いじゃがいも（アーリーローズ）があったことと、お米の湯炊きといって、お湯を沸かしてから、後からお米を入れるそうです。すると早く炊けるのです。朝食の分と昼食の分を一緒に炊きました。お昼はおにぎりで、十人分ずつ専用の箱に入れて、それを持って作業に出かけました。写真にも先頭の日

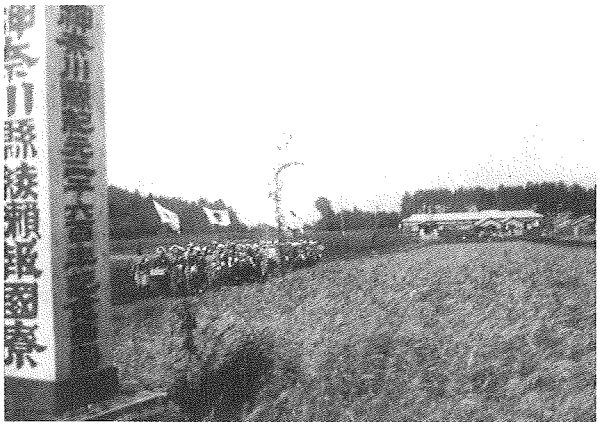


写真13　日の丸を先頭に行進する生徒たち（山本愛子氏提供）

写真14　勤労記念章（山本愛子氏提供）

の丸を持っている人の横に、お弁当箱を持っている人が写っています。

朝は六時起床だったと思います。太鼓の合図で起きるのです。作業は四時半位までだったと思います。

宿舎に帰ってくると、食事の前にお風呂に入りました。一班十名ずつ順番です。私は第四班だったので、ずっと一番風呂に入れないのかと思いましたが、日替わりで順番を変えて交替で入ると知らされました。理由はわかりませんが、お風呂に入る前と、出た後に体重を計りました。健康チェックでもしていたのでしょうか。

夕食が終わった後、八時頃から宿舎内で反省会がありました。これも太鼓の合図でした。寮長さんから講話がありましたが、あまり面白いお話ではなかったので、早く寝たいなと、そればかり考えていました。就寝時間は九時頃でした。

最終日の前の晩には、大福が振る舞われ、送別会のような事が行われました。寮長の「ヘッチョイ節」がとても面白かったです。私達も校歌を唱い、ほかに何か歌を歌ったように思いました。

〜寮の職員のことは覚えていますか。

山本　男性ばかり四名いらっしゃいました。寮長さんはお若い方で、皆さん気にしていましたね。なにせ当時の横須賀高女はとても厳しくて、男性で校内に入れるのは郵便配達の方だけでした。

〜食事はいかがでしたか。

山本　あの当時ですから、世間一般も質素でしたので、そんなに不自由は感じませんでした。量も充分だったと思います。収穫したじゃがいもも出ました。

最後の夕食にはお赤飯がでまして、とても美味しかったと記憶しています。

〜学校に戻ってから何か行事はありましたか。

山本　出かける前に壮行会のようなものがあったような気もするのですが、記憶にありません。帰ってからは、在校生を集めて報告会を行いました。私たちの代表が一名、寮の様子をお話ししました。でも、私たちが学校に戻ってすぐに綾瀬報国寮が廃止されたということは、全く知りませんでした。

〜写真のほかに、何か当時の品はありませんか。

山本　バッジがあるんです【写真14】。これがそうです。入寮記念に配られました。

（二〇〇六年二月十一日）

証言中にある作業往復の際に歌われた歌は、次節で紹介する綾瀬報国寮発行の『修養録』に楽譜が掲載されていた。題名は「黎明勤労の歌」である。残念ながら山本は入寮した日時を記憶していないが、四一年六月ともなると、報国寮周辺では後述するように移転候補地の検分や用地買収の説明会などが慌しく行われていて、おそらく職員も落ち着かない状況だったと思われる。

『修養録』　綾瀬報国寮でも『修養録』を発行している。[29] 内容は全九十二頁で、勅語・詔書と朗詠（天皇・皇后の御製）・朗誦・歌謡などに分かれている。綾瀬向けとしては、女子青年団設立に関する内務省・文部省の訓令・通牒や、「婦人愛国の歌」や「女子青年団歌」などが収録されている。ただ、存続期間が短かったため、入寮者の体験記などは掲載されていない。

4　三保報国寮・鳥屋報国寮

四二年に近藤壌太郎が神奈川県知事に着任すると、彼は神奈川の報国寮事業を高く評価し施設の増設を指示した。そこで、四三年に足柄上郡三保村中川箒沢（ほうきざわ）字上ノ原台に三保報国寮（現、山北町中川）が、同じく津久井郡鳥屋村字奥野（通称杉平地）に鳥屋報国寮（現、津久井町鳥屋）がそれぞれ開設された。施設の敷地は、四三年八月四日に三保村と鳥屋村から県に無償譲渡されている。[30]

両報国寮の建物については、戦後の払い下げ関係史料からある程度復元できる。[31] 三保報国寮は部屋の用途を記した平面図が残っており、建坪は約九七坪である。事務室・指導員室・食堂・小使室・炊事室・浴室・脱衣所・班室（四室）・便所（別棟）がある。

鳥屋報国寮には、部屋の用途が記されていない平面図が残っている。建坪は三保とほぼ同じで、部屋数も同じだが、部屋の配置が若干異なっている。

しかしこの時期はアジア太平洋戦争の戦局も急迫し、職員の応召や物資の欠乏などでほとんど活動らしい活動ができないまま敗戦を迎えることになった。

5　第二丹沢報国寮

第二丹沢報国寮については、史料がほとんどなく実態がよく判っていない。おそらく以下に述べる通り、三保・鳥屋報国寮と同じ時期に近藤知事の意向によって六番目の報国寮として設置が計画されたが、何らかの理由によって報国寮ではなく勤労訓練所として開設されたものと思われる。

四三年に愛甲郡煤ケ谷村札掛（ふだかけ）にある建物を、丹沢第二報国寮として県が無償で譲り受けるという文書がある。[32] 一方、同じ場所に神奈川県丹沢勤労訓練所が四三年六月に開設され、四五年一月十日に廃止されていることも明らかとなっている。[33]

そして、四六年九月十二日に神奈川県森林組合連合会から県知事宛に施設の無償払い下げ申請が出されている。[34] その中で、愛甲郡宮ケ瀬村札掛にある「山の家」（建坪約四五坪）は、元々三四年頃に神奈川県山林会が登山者の為に建設した山小屋だったが、戦時中に県に寄付して「錬成道場」となった。しかし、敗戦後は利用させず放置されたままなので、再び山小屋として活用したので、無償払い下げを願い出たとある。戦時中の県への寄付の経緯について、申請書では次のように述べている。

大東亜戦争の起こるや時の長官近藤知事より右の建物（「山の家」

引用者注）は錬成道場として使用し度いから戦争完遂の為協力せよとの励奨により県に寄付致しました。

その時期については、「大東亜戦争勃発後」としか記されていないが、ここで先述の四三年の「第二丹沢報国寮」についての文書との関係が注目される。三保・鳥屋報国寮を設置させた近藤知事が、さらにもう一カ所報国寮を増設する意図があったとしても不思議ではない。しかし、結果として札掛の「山の家」は報国寮ではなく、勤労訓練所になったとすれば辻褄があう。

なお愛甲郡煤ケ谷村は、戦後の町村合併により宮ケ瀬村となり、さらに現在は清川村となっている。

六　その後の報国寮

丹沢報国寮　敗戦後、丹沢報国寮は丹沢治山寮と名称を変更していたが、ほとんど利用されず遊休施設と化していた。そのため、一九四七年（昭和二十二）八月二十五日付で、地元の中郡東秦野村長と愛甲郡煤ケ谷外一ケ村組合村から、新制中学校校舎として転用するため、県に払い下げ陳情書が提出された。これを受けて、同年十二月十一日付で払い下げが許可され、代金は二十一万六〇〇〇円であった。ところが、両村の財政難からこの支払いが滞ったため再度代金半減の陳情がなされ、県もやむなくこれを認め、十万八〇〇〇円を領収している。[35]

箱根報国寮　敗戦後、箱根報国寮は丹沢と同じく名称を箱根治山寮と改称した。丹沢と同様に宿泊施設として時折利用されるだけで、施設もほとんど修理されることなく荒れるままになっていた。

四七年七月、湯本町長が箱根治山寮の建物を新設の湯本中学校の校舎として転用したい旨の払い下げ陳情書を県に提出した。同時に湯本中学校父兄会も二百名の署名を添えた同趣旨の陳情書を提出している。一旦払い下げは決定したが、その後県からの要望でご破算となった。それは、林業従事者の養成機関として県立愛林青少年訓練所が五〇年五月に新設されることになり、元箱根報国寮の建物が必要になったからである。

愛林青少年訓練所設立の経緯については、四九年、新潟市で全国知事会が開催された際、同席したGHQ側から戦争で荒廃した森林の復興と全国で百五十万人にものぼる不就学・不就労青少年問題を解決するために、アメリカのTVA（テネシー川流域総合開発計画）の森林資源開発計画の中で行われたCCC活動[36]を取り入れよという強い助言があった。これに対し、この会議の議長を務めていた内山岩太郎神奈川県知事が、「神奈川県では、報国寮があるから、これをモデルケースとしてやってみましょう」と発言した。このことが、愛林青少年訓練所設立の口火となったのである。[37]

愛林青少年訓練所は、訓練期間一年、定員五十名で出発した。五一年に二年制となり、五四年には、三年制にするとともに、建物も増築された。さらに六〇年に四年制にして、県立湘南高校の通信制と提携して高校卒業の資格も取得可能となったが、建物の老朽化が激しくなり厚木市七沢への移転が計画された。六八年四月、新しい建物が完成して移転、同年七月に林業研修所と改称した。その後幾度か名称の変更などがあったが、現在は自然環境保全センターとなっている。

綾瀬報国寮　綾瀬報国寮は開所後わずか三カ月で、海軍の相模野航空隊と厚木飛行場建設のため、県営綾瀬苗圃とともに敷地が買収されることになった。買収交渉の結果、報国寮と苗圃が海軍に正式に

引き渡されたのは、四一年八月十一日のことであった。報国寮の建物は、海軍施設部の事務所となった。

軍の意向により廃止のやむなきに至ったとはいえ、女子報国寮が必要でなくなった訳ではなく、苗圃も含めて当然別の場所への移転が検討された。苗圃及び寮関係者が移転地を求めて、各地を検分しているが、結局寮は廃止されてしまった[38]。

戦後、厚木基地はアメリカ軍によって引き継がれたが、報国寮の建物は、五五年頃には、基地従業員向けの国営アパートとして利用されていた[39]。

三保報国寮

敗戦により三保報国寮は、箒沢治山寮と名称を変更されたが、丹沢・箱根と同じく有効利用にはほど遠い状況であった。そのため、四七年四月に三保村から三保村国民学校（現、山北町立三保小学校）中川分教場として使用するために払い下げが陳情されている[40]。経緯は不明だが、建物は松田町に払い下げられ、同地には、その後県立平塚江南高校の山小屋が建てられ、現在は「奥箒沢山の家」がある。

鳥屋報国寮

敗戦後、鳥屋報国寮の建物は利用されることもなく、放置されたままの状態だったが、四七年四月鳥屋村村長から県に対して、伝染病隔離病舎用移築材として使用するために払い下げが陳情されている[41]。同年五月二十日に代価二万七五〇〇円で払い下げられている。

さらに五六年七月に至り、津久井町奥野地内（町村合併により、鳥屋村は津久井町となる）の旧報国寮敷地（約一四九二坪）が津久井町に植林地として無償で譲渡されている。その決裁書類に添付されている津久井町長からの同年四月六日付申請書には興味深い事実が記されている[42]。それによると、鳥屋報国寮敷地となった土地は、四三年五月二十二日に一旦鳥屋村から神奈川県に貸与したが、「県の要求により貸与を寄附に変更を余儀なくされ」、同年八月四日に県へ寄附したとある。貸与から寄附への変更には、県の強要があったのである。だから、今回は「前記いきさつを諒とせられ」無償で払下譲与を受けたいと申請しているのである。県もこの点を理解して無償の譲与に応じている。戦時中のツケを戦後に払わされたということだろう[43]。現在、寮の跡地には「丹沢観光センター」が建っている。

七　おわりに

以上、戦時下の神奈川で実施された報国寮事業を紹介してきたが、果たしてこの事業は所期の成果をあげることができたのだろうか。簡単に整理してみよう。

報国寮事業は内務省系の農林官僚と地方官僚の人脈の中で発案され、神奈川県で具体化された。当初の目的は若年層に対する林業振興の理念普及であった。そのため青年団や学校報国団を事業対象とした。実施にあたっては、担当部署が林野と教育の双方にまたがるという、縦割行政にしては珍しい態勢をとった。その結果、これが全国的にも例をみない事業として注目されることになったのである。

神奈川での実施に際し、五カ所の報国寮が設置された。設立時期が遅く、ほとんど活動できなかった三保・鳥屋や、途中廃止された綾瀬もあったが、丹沢・箱根の両報国寮が全期間を通じて活動した。予算面でも、戦時下の事業にも拘わらず、かなり優遇されていたことも分かった。

五カ所の報国寮の中で事業効果が最も高かったと思われるのは箱根で

あり、存続期間が短かったが、綾瀬がそれに次ぐ。丹沢は今回紹介した体験者の年齢や立場を割り引いて考えたとしても、箱根に比べるとやや劣る。その理由として、箱根・綾瀬が基本的に単一の学校からまとまって入寮したのに対して、丹沢が混成になることが多かったことがあげられる。また、入寮者の年齢も丹沢は平均年齢が若干高くなったり、社会経験をもつ者も含まれていたこともあげられよう。一方、箱根でもエリート校の場合は希望者が少なく、クジ引きで定員を埋めたりしていたので、あまり積極的な参加は期待できなかっただろう。

現実の作業内容を見ると、いくら当時の厳しい軍国主義教育を受けたとは言っても、肉体労働に慣れていない青少年にはとても耐えられない作業だったと思われる。ただ、当時の風潮として本音は隠す傾向にあり、『修養録』に掲載された感想文は、どれを取っても「熱誠溢れる」ものばかりである。その立て前と本音の使い分けをしっかり見極めなければならない。

また、具体的な森林治水事業の点から見た時に、都会の素人集団による作業が、充分な成果をあげることができたかと言えば、それは疑問である。実際に報国寮でそのような比較が行われた事例はないが、県営綾瀬苗圃での勤労奉仕について、横浜工業学校生徒と愛甲農業学校生徒とを比較して、「仕事ニ於テハ大人ト小人カ」という記述がある。[44] これは報国寮の作業でも言えることだろう。

さて報国寮事業は、徐々に本来の目的から逸脱していったと思われる。まず、綾瀬は女子に対する配慮から、作業内容が林業ではなく農作業中心の軽作業となった。この段階で、既に林業振興は二次的な目標に後退し、性別・年齢それぞれに応じて国家に奉仕するという、大きな目標が前面に押し出されてくるのである。すなわち、「忠君愛国」思想を教えるという、当時の教育における大目標が全てを覆い尽くしてしまったと言えよう。これは丹沢・箱根にも言えることで、生徒の感想文をいくら読んでも、林業振興に対する理解が深まったとは思えない。そこに認められるのは、学校で教えられた「忠君愛国」思想のみである。

以上のことから、当時としては画期的な試みであった報国寮事業は、表面的には戦争末期まで生徒が続々と入寮し、熱心に森林治水事業に取り組んでいたが、本来の林業振興という目標の達成は不十分だったと考えられる。戦争という大目標のために、全てがそこに収斂されていったのである。

今後の課題としては、報国寮事業の背景には和田正洲の指摘通り、ナチス＝ドイツのアルバイトディーンストがあったことは確実である。この点について、さらに研究を進めていきたい。また、今回は他都道府県の状況を調査することができなかったが、これも課題としたい。

最後に本論執筆にあたり、報国寮での体験をお話し下さった方々、戦時下の小田原地方を記録する会と神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会の方々、そして特に川島敏郎氏・柏木操男氏・井上弘氏・香川芳文氏には、資料の提供・助言など様々な面で大変お世話になった。記して感謝したい。

〈注〉

（1）戦時下の小田原地方を記録する会は、一九七九年設立で神奈川県西部の戦争に関する様々な調査・研究活動を行っている。現在会員は六名。会誌は『戦争と民衆』年二回発行。

（2）出井善次『私学中等教育の研究～戦時下浅野綜合中学校の事例』（筑波書房二〇〇一年）には、巻末資料編に入寮案内書「箱根報国寮」が紹介されて

いる。

戦時下の県立平塚高女を記録する会編『火薬廠のある街で～戦時下の県立平塚高等女学校』（夢工房　一九九七年）には、「綾瀬報国寮実習風景」の写真が掲載されている。

（3）入寮案内書「箱根報国寮　勤労奉仕施設」（神奈川県　発行年不詳）。

（4）村上龍太郎は、農林官僚として戦後の「緑の募金」の始まりである国土緑化運動の生みの親であり、その中核行事である全国植樹祭の発案者でもある。そして、「森林は第一のダムであり、民政のゆりかごである」という言葉を残している。

（5）香坂昌康は、一八八一（明治十四）年生まれで、内閣・内務省系の内政官僚である。福島県知事・愛媛県知事・岡山県知事・愛知県知事・東京府知事などを歴任した。一九三六（昭和十一）年から三八年まで大日本連合青年団並日本青年館理事長職を務めた。

（6）半井清は、一八八八（明治二十一）年に生まれ、香坂昌康と同じく内閣・内務省系の内政官僚である。朝鮮総督府宗教課長を皮切りに佐賀県知事・栃木県知事・宮城県知事などを歴任し、一九三六（昭和十一）年神奈川県知事に就任した。その後は、北海道庁長官・大阪府知事となり、四一年から四六年まで官選の横浜市長を務めた。戦後、横浜商工会議所会頭や横浜市社会教育委員会議長を経て、五九年四月の市長選挙に立候補し二十八万票余を獲得して当選した。

（7）宮沢敏雄「報国寮の回顧　造林史について想う」（『神奈川県林業史』神奈川県農政部林務課　一九七一年）。

（8）「昭和十四年度　通常県会議案原稿諮問案」神奈川県立公文書館蔵。

（9）『神奈川県公報』一一三四号（一九三七年九月三日）。

（10）前掲書　注（7）。

（11）前掲書　注（7）。

（12）和田正洲「丹沢報國寮」（二宮町史編集委員会編『町史研究　にのみやの歴史』第二号　一九九〇年）。

（13）神奈川県立教育センター『神奈川県教育史　資料編第三巻』神奈川県教育委員会　一九七三年　三八九頁。

（14）『横浜三中・三高・緑高六十年史』創立六十周年記念事業実行委員会　一九八三年　一八二頁。

（15）神奈川県立図書館蔵。

（16）前掲書　注（14）。

（17）『Y校百年史』Y校百年史編集委員会　一九八二年　七一九頁。

（18）『神中・神高・希望ヶ丘高校百年史　資料編』神奈川県立希望ヶ丘高校創立百周年記念事業合同委員会　一九九八年。

（19）記録する会「戦争と民衆」第三十八号　一九九七年八月。

（20）筆者蔵。

（21）藤野豊『強制された健康』吉川弘文館　二〇〇〇年　五八頁。

（22）「有栖川宮記念厚生資金書類」神奈川県立公文書館蔵。

（23）「昭和十五年度　新規事業予算調書」神奈川県立公文書館蔵。

（24）前掲　注（22）。

（25）「齊藤定八日記」一九四〇年十月二十一日・二十四日・二十六日・三十一日・十一月八日（『綾瀬市史4　資料編・現代』綾瀬市　二〇〇〇年）。

（26）前掲　注（23）。

（27）前掲　注（22）。

（28）記録する会『戦争と民衆』第五十七号　二〇〇六年八月。

（29）香川芳文氏蔵。

（30）「昭和十八年　参事会議案原稿」神奈川県立公文書館蔵。

（31）「昭和二十二年度　県有財産払下」神奈川県立公文書館蔵。

（32）「昭和十八年度　参事会議案」神奈川県立公文書館蔵。

（33）『神奈川県公報』一八四九号　一九四五年一月二十五日。

（34）「昭和二十一年度　県有財産払下」神奈川県立公文書館蔵。

（35）「昭和二十五年度　県有財産払下」神奈川県立公文書館蔵。

（36）青少年を一定のキャンプに収容し、CCC（Civil Conservation Corps市民

保全団）を組織させ、この組織に一定の教育と実施訓練を行いながら森林資源の保全開発に従事させる活動のこと。（『二十周年記念誌　二十年のあゆみ』神奈川県立林業研修所　一九七一年）。

(37) 『箱根町教育史』箱根町教育委員会　一九七〇年。

(38) 前掲「齊藤定八日記」一九四一年五月二十八日・二十九日・三十日。

(39) 『綾瀬市史7　通史編・近現代』綾瀬市　二〇〇三年（三七七頁）。

(40) 「昭和二十二年度　県有財産払下」神奈川県立公文書館蔵。

(41) 前掲　註(41)。

(42) 「昭和三十一年度　県有財産払下書類（無償譲渡）」神奈川県立公文書館蔵。

(43) 前掲　註(43)。

(44) 前掲「齊藤定八日記」一九四〇年十月三十一日。

著者プロフィール

矢野慎一（やの・しんいち）　昭和三十三年　東京生まれ。
国学院大学大学院博士課程前期日本史学専攻中退。
現在、神奈川県立六ッ川高等学校教諭。戦時下の小田原地方を記録する会会員。
共著『戦時下の箱根』（夢工房）、『帝都と軍隊』（日本経済評論社）、『しらべる戦争遺跡の事典』（柏書房）